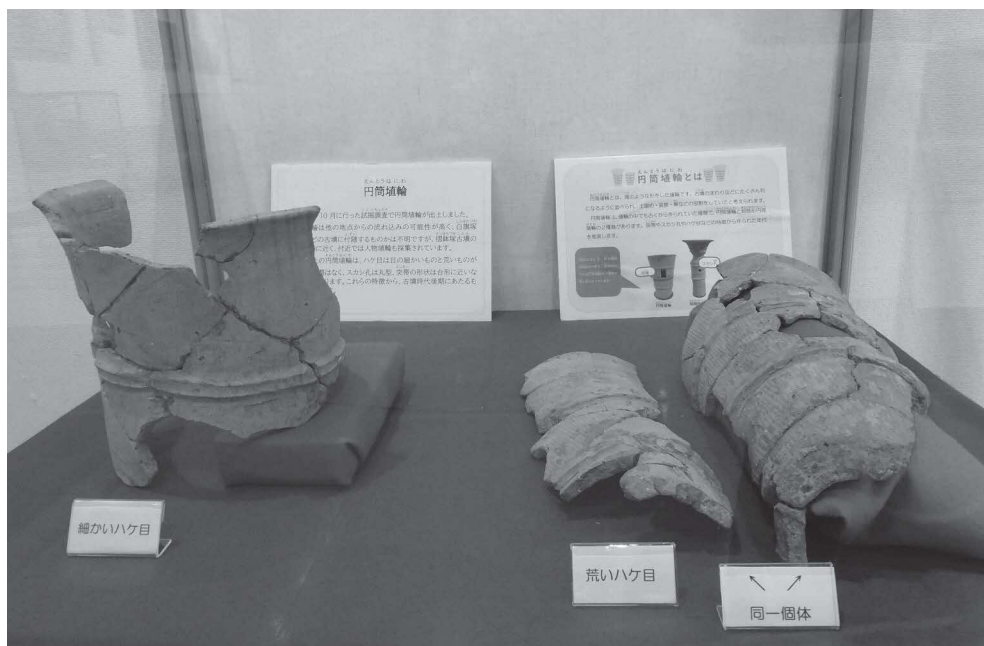


もくじ

はい文化財係です③9 足立区に31年ぶりに埴輪が出土しました … P1  
文化遺産を伝える史跡⑤ 畳屋薬・若田太右衛門 … P3

伊興遺跡公園展示館で展示中の円筒埴輪



# 足立史談

第668号

2023年10月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集部

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

はい、文化財係です③9

## 足立区に31年ぶりに埴輪が出土しました 上野未来



中でも古くから作られ

円筒埴輪は、埴輪の  
「都月型円筒埴輪」が出現します。

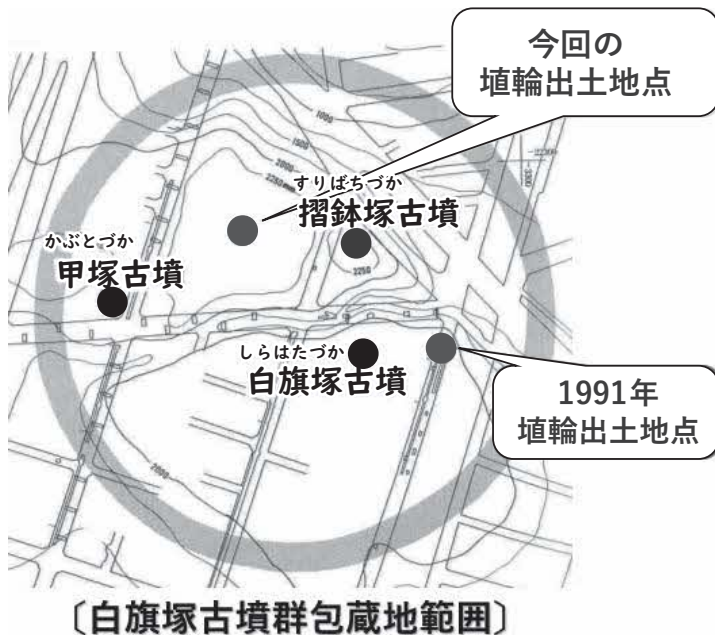
起源は弥生時代後期に吉備地方（現在の岡山県を中心とする地域）で発達した、葬送儀礼用の特殊器台・特殊壺だと考えられます。三世紀半ば過ぎに最初の前方後円墳といわれる箸墓古墳の葬送儀礼でも使われた「宮山型特殊器台・特殊壺」を経て、最古の円筒埴輪型式である「都月型円筒埴輪」が出現します。

たと考えられます。起源は弥生時代後期に吉備地方（現在の岡山県を中心とする地域）で発達した、葬送儀礼用の特殊器台・特殊壺だと考えられます。三世紀半ば過ぎに最初の前方後円墳といわれる箸墓古墳の葬送儀礼でも使われた「宮山型特殊器台・特殊壺」を経て、最古の円筒埴輪型式である「都月型円筒埴輪」が出現します。

この円筒埴輪についての考察がまとまりましたので報告します。

令和四年十月に、三十一年ぶりに古墳に付随するとみられる埴輪片がまとまって出土しました。出土した埴輪片はほとんどが接合でき、円筒埴輪であることが判明しています。

足立区では古墳時代の遺跡が多く見つかっています。足立区内での調査の際に出土するのはほとんどが土器類や石製品などです。



この埴輪片は、低地帯にある土坑の上層部から出土しました。古墳は、

■円筒埴輪片の発見 三十一年ぶりの出土となったのは、東伊興三丁目地点での試掘調査で出土した、たくさんの方筒埴輪片です。

■円筒埴輪片の発見 三十一年ぶりの出土となったのは、東伊興三丁目地点での試掘調査で出土した、たくさんの方筒埴輪片です。

ていた種類で、最も大量に全国的に広く使用されてきました。そのことから埴輪の編年研究が進み、古墳の年代を決定する標識となっています。埴輪の編年では、主に胎土・成形・調整・突帯（とつたい）・スカシ孔・焼成などの特徴から作られた時代を推測します。〔二頁図参照〕

この埴輪片は、白旗塚古墳群などの古墳に付随するものかは不明ですが、摺鉢塚古墳(すりばちづかこふん)のあった場所に比較的近いので、摺鉢塚古墳に付随する可能性がありま

地山が黄褐色シルト層である微高地上に営まれるのですが、この埴輪片は地山が青灰色シルト層である低地帯からであり、近くに古墳の墳丘もありません。また、埴輪片は土坑の上層部から出土していることから、人為的に埋められたというよりは、土坑が埋まっていく過程での埴輪の流入と考えられます。つまり、その場所に据え置かれていたのではなく、微高地から流れ込んできた可能性が高いようです。

かつて甲塚(かぶとづか)・摺鉢塚・白旗塚などの古墳群が存在したとされる地区の総称で、足立区埋蔵文化財包蔵地に指定されています。『新編武蔵風土記(しんぺんむさし

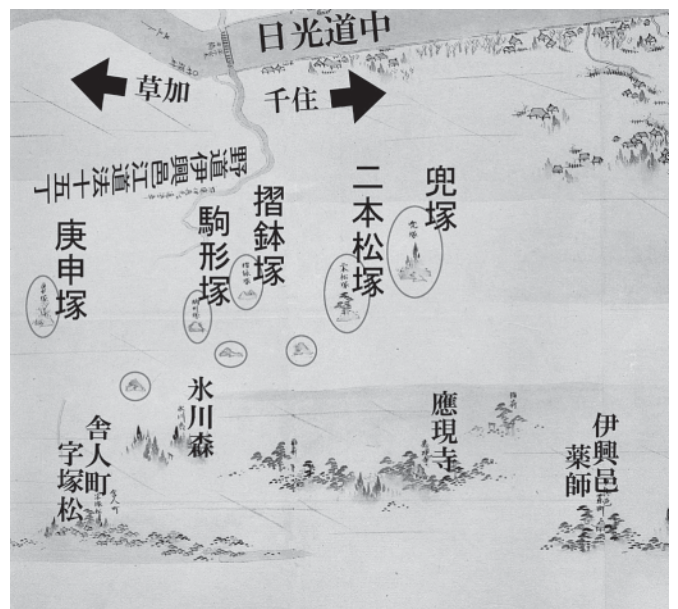
す。(前頁・白旗塚古墳群包蔵地範囲参照) 今回出土の円筒埴輪は、ハケ目は目の細かいものと粗いものがあり、2次調整はなく、スカシ孔は丸型、突帯の形状は台形に近く低いなどの特徴があります。これらの特徴から、古墳時代後期にあたるものと考えられます。■白旗塚古墳群 白旗塚古墳群は、伊興・谷下・狭間遺跡の東側に隣接し、標高およそ2〜2.25m付近の低平な自然堤防に位置しています。



円筒埴輪と古墳時代の年代標識 摺鉢塚古墳に附随する円筒埴輪に加筆

■これまで白旗塚古墳群で発見された埴輪 円筒埴輪が出土したのは、平成三年(一九九一)に行われた試

ふどき)によると、伊興一帯には播鉢塚・甲塚・聖塚(ひじりづか)・船山塚などの古墳が記されており、古墳群が形成されていたことがうかがえます。 また「日光道中分間延絵図(にっこうどうちゅうぶんけんべいのべえず)」では、伊興地区に古墳を含む8基の塚があることが示されています。現在、そのほとんどが地域開発のため削平され、現存するのは白旗塚古墳のみです。(※漢字表記は資料に基づきました。)



○印。8基の古墳が描かれ5基に名前が記されている。日光道中分間延絵図(1806年)一部に加筆

掘調査・本調査です。白旗塚古墳東側で埴輪片が多数確認されました。そのほとんどが円筒埴輪片です。埴輪片は溝状の遺構からの出土ですが、その溝は古墳の周溝ではなく、平安時代以降の溝跡の可能性が高く、この埴輪片も他の地点からの流れ込みと考えられ、白旗塚古墳群の

どの古墳に付随する埴輪かは不明です。出土した埴輪片は、突帯の形状などから同じく古墳時代後期にあたるものと考えられます。 また、それ以外には、摺鉢塚古墳に付随すると伝わる人物や馬をかたどった形象埴輪・円筒埴輪の出土実績があります。 白旗塚古墳群地域は、出土遺物などの古墳に付随する遺物か分かりにくい反面、豊富な出土物があり、まだ多くの可能性がある地域です。 今回出土した埴輪は、伊興遺跡公園展示館で展示しています。この機会にぜひ見に来てください。(伊興遺跡発掘調査員)

(伊興遺跡発掘調査員)

文化遺産を伝える史跡⑤

畳屋薬・若田太右衛門

多田文夫

千住の琳派こと村越其榮や向榮の作品を数多く伝来しているのが、千住仲町の旧家、若田太右衛門家です。『千住の琳派』や『琳派の花園 足立』に多くの作品が掲載されているので、ご存知の方も多いと思います。今回は、その若田家をご紹介します。

1 伝統薬・畳屋薬の発展

■畳屋薬 千住掃部宿(現、千住仲町)で江戸時代から千住の薬問屋として全国に知られていました。

まず畳屋薬についてですが一般に「黄疽薬」として知られています。黄疽は肝臓や胆のうが病気になる、皮膚や目が黄色くなる病です。ほかにも胃腸など腹部の痛み全般に効く薬と評判で、北陸の金沢では「江戸の薬」として知られていました。(『尾山のくすり大将』第五五号、中屋彦十郎薬局(金沢市長坂)、二〇〇三年)。

若田家の畳屋薬の歴史については、これまで鈴木昶『日本の伝承薬』(薬事日報社、二〇〇五年)が若田家十七代目の正治氏(一九一五〜九五)に取材した記事をまとめています。薬の成分は大正三(一九一四)年の売薬免許申請によると鉄粉、牡蠣、

甘草、蕨粉で、粉薬を葉包紙に一回分ごとに分けて提供されました。鉄さび

色をしていたそうです。効能は黄疽、喘息、眩暈、動悸などでした。戦後は錠剤となり、名前も「タタミヤS」とカタカナ化して、明治薬品の販売網のつて全国に広がりました。

■「畳屋薬」という名前 商号は「畳屋薬」(たみやくすり)です。この名前の由来ですが、旅に疲れた羽黒山の修験僧に一夜の宿を貸して、親身に世話をしたところ、貧血気味で肝臓を患っていた当主の太右衛門に薬の処方を書いた巻物を置いて旅立ったと伝えられたといえます。

こうして畳屋薬という名前になったそうですが、江戸時代には他にも京都の「俵屋薬」(風邪薬)、江戸中橋の「新屋薬」(婦人薬の実母散のこと)、江戸日本橋小網町の「釜屋艾」(お灸)など屋号を冠した薬が知られており、いずれも商家が薬を調合する技術を学び評判となり頒布していった発生過程をうかがわせれます。

ちなみに若田家が保存する古文書が参考になります。文化八(一八一二)年の取次先からの証文では「畳屋太右衛門薬」とあり、その後、文政十(一二二七)年に「畳屋薬」となっていて、文化以前はフルネームの畳屋

太右衛門薬といい、のち畳屋薬と変遷したことがわかります。

■江戸東京の伝統薬 評判となったと思しき畳屋薬の取次先(販売先)が次のように史料にあらわれます。江戸時代は若田家文書から、明治時代は宣伝チラシの木版(いずれも若田家蔵)から記述しています。

①江戸時代(文化〜天保期)の取次先

(一) 内は現在地

- 本町(中央区日本橋本町)・儀兵衛
- 神田鍋町(千代田区神田鍛冶町)
  - 伊勢屋半兵衛
- 源助町(港区東新橋)・喜右衛門
- 麹町(千代田区麹町)・茂右衛門
- 麹町(千代田区麹町)・黒田屋安兵衛
- 渋谷宮益町(渋谷区渋谷)
  - 橋和屋清次郎
- 武州川越(埼玉県川越市)・麻屋定七

②明治時代の取次先

- 深川不動境内 栗餅屋・山崎辰五郎
- 下谷三橋電車停留場前 堀江薬店
- 浅草仲見世西側 金物商・飯田商店
- 赤坂渋谷宮益町 酒商・橋和屋清次郎
- 牛込句納戸町 菅沼薬局
- 芝田町四丁目 足袋商・宮澤善蔵

となっています。当時、どれほどの評判だったのかですが、江戸東京の伝統薬の番付である明治十一年(一八七八)「東京高銘 妙薬一覽」(開

運堂の板行)に「惣頭取」として大書して掲載され、ブランド化したことが判ります。(次頁掲載)

※拙稿「千住掃部宿の名薬 畳屋太右衛門薬」(本誌六〇三号、二〇一八年)

2 若田太右衛門家の文化

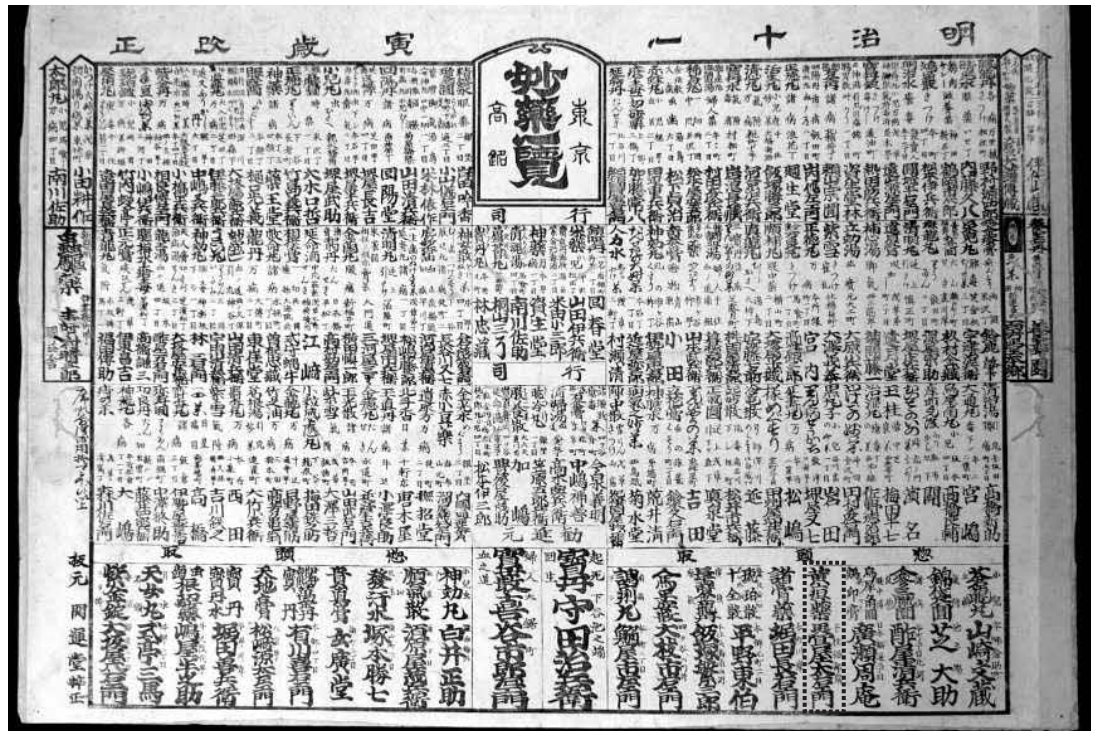
■千住酒合戦 畳屋太右衛門薬として取引が始まっていた文化十二年(一八一五)、千住で江戸琳派の酒井抱一や谷派の谷文晁らが参加した大催事、千住酒合戦が開催されました。翌年発行された酒合戦の番付には

西ノ方の前頭として「千住 畳太」という名前が登場します。酒量もあるかと思えますが、ほかにも同時期に接骨や湿布薬の「黒膏」の製造元として名をはせて居た名倉家と思しい「名倉大」も登場しており、出資者としての掲載ではないかと捉えています。

■工芸品の制作

若田家は千住と江戸の大催事だった酒合戦だけでなく、千住掃部宿の祭礼でも重役として深く関わっていました。いまでも千住仲町の氷川神社で登場する天保四(一八三三)年制作の「四神鉾」があります。調製の世話人として「畳屋太右衛門」が登場します。四神鉾は江戸の職人たちに発注したようので、鉾鉾部分には「細工人 附木町鋳屋鉄五良」の名が刻まれています。

また若田家から郷土博物館に寄贈



明治11年(1878)「東京高銘 妙薬一覧」 下段右側に「豊屋太右衛門」の名が見える。

された「掃部宿小型厨子」も見事な細工が施され白木が中心という江戸、東国らしい設えとなっています。

この小型厨子は、十九代目の若田昇一氏によると掃部宿の大山講で用

に床の間がありました(拙稿「千住掃部宿 豊屋太右衛門家の屋敷図」、本誌六〇四号)。

一つの床の間飾りを日本の季節、例えば二十四節気にあわせると最低

いられたもので、若田家抱えの蔦頭、太田屋(川名家)が若田家当主に大山参りて持参していたの祭礼にまつわる工芸品への造詣に加えて、同家では日常の暮らしの中で季節の美を取り込んでいました。

七二本の掛軸が必要となります。今も若田家では季節に合わせた床の間飾りを行っていることが注目され、十二か月の床の間飾りの様子が美術雑誌の『國華』一五三二号で取り上げられました(荻原ちとせ「地域の生活と美術作品」参照。二〇二三年五月)。

同誌の掲載記事によると、一つの床の間で月に二回から三回掛け軸などを飾り替えています。

こうした暮らしの飾りを制作していったのが千住の琳派絵師、村越其栄と向榮で、とくに向榮の代になると、病気見舞いや葬式など、普段付き合いをしていたことが判ります(拙稿「商家と書家・絵師のお付き合い」、本誌六〇六号)。向榮の住まいは千住仲町の氷川神社ちかくで若田家との距離は二五〇〜三〇〇m、徒歩五分程度のご近所でした。

こうした暮らしがある葉問屋の姿を考えると地域美術史や民俗学に学びながら、美術品も祭礼の工芸品も歴史の「史料」となると思います。

豊屋薬という江戸東京の伝統薬の系譜は、同じ千住宿内の名倉家の黒膏等と同じく、当時の人々の社会を支える力となっており、その繁栄とともに町の文化、さらには多方面から注目される文化史を伝えました。

若田昇一さんご夫妻とは、約十八年前から調査にご協力いただいています。史料を介したお話から学ぶことが多くあります。こうした有形無形の情報があることが文化遺産調査の史跡たる所以です。『千住の琳派』『大千住一町の繁栄と祝祭』『琳派の花園 あだち』など博物館の図録も併せてご覧いただけたら幸いです。

(学芸員・文化遺産調査担当係長)



昭和17(1942)年 豊屋薬の店先 (若田家蔵)